PDF Compressor Pro

東日本大震災から2年です。

震災復興支援メディア　全国4万部配布　2013年3月20日　季刊 年4回(3,6,9,12月) 発行

震災リゲインプレス Press 第4号

発行元:震災リゲイン　発行人:相澤久美　編集人:高木伸哉　編集部:〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6　Tel／03-3584-3430　Fax／03-3560-2047

次頁▶ あなたにもできる 復興支援 掲載しています！

現地レポート

地域の誇りを途切れさせないために

20年に一度、伊勢神宮に奉納する岩手県釜石市の伝統神楽

文＝中川哲雄

岩手県の釜石で、元禄12(1699)年からの歴史を持つ南部藩壽松院年行司支配太神楽。20年に一度の伊勢神宮式年遷宮でも、県を代表して100年前から奉納されてきたこの神楽を、釜石市只越町の菊池邦彦さんは前回、つまり20年前にも奉納した。小学生の時から、毎年10月の釜石まつりなどで地元の神社に奉納するようになった菊池さん。しかし式年遷宮での奉納は、選りすぐりの20人ほどしか参加できない特別な場だ。前回のときはまだ30歳になったばかりだった菊池さんは、メンバーの中で一番若いほうだった。伊勢神宮内宮の参集殿に入った瞬間すーっと変わった空気を、菊池さんは今でもはっきり覚えている。

次の式年遷宮まであと3年となり、「今度は誰が行くべか」と少しずつ話題に上りだしていた2011年の3月11日、只越町は津波に呑まれた。太鼓や装束など神楽の道具は、そのほとんどが海に消えた。菊池さんは、毎年神楽を奉納していた神社で夜を明かした。流された菊池さんの家から、なぜか神楽で羽織る半纏だけが無事見つかった。

瓦礫だらけになった町。だけどお祭りだけは「やりたい」というより「やらないわけにはいかない」。元々、盆正月にも帰ってこない町の出身者がなぜかお祭りになると集まってくる土地柄。「死んだやつもやれって言ってるよ」「できることはこれまでどおりやろうや」……。

その年の10月の釜石まつりは、人手もないし装束も山車も太鼓も旗もなかったけれど、とにかくやった。翌2012年10月の釜石まつりでは、震災前の賑わいがだいぶ戻ってきた。

「特にお年寄りたちはすっかり落ち込んで体調を崩してしまう人もいて、笛や太鼓の音がみんなの元気を取り戻してくれるんです」と、菊池さんの仲間の今入義章さんは語る。

そしていよいよ今年の10月に迫った式年遷宮での奉納。踊り手3人、笛2人、太鼓2人、お囃子6人、神楽を舞うのに最低限の13人だけでも何とかして伊勢に……！　経済や雇用の回復は未だ遠く、式年遷宮に向けて地元だけでの費用捻出が厳しい状況、だが奉納への熱意は震災以前にも増して強い。各方面に支援金などの協力を呼びかけながら懸命に実現の道を探るのは、今回みんなの中心になって切り盛りする笹山政幸さん。

「20年に一度の伊勢神宮での神楽は地域の誇りであって再生の希望。絶対に途切れさせたりできません」。

改めてあの日のことを話し合う、左から今入さん、菊池さん、笹山さん。

支援金を送る

［寄付先］口座名義「年行司神楽支援実行委員会」宛
●ゆうちょ銀行口座から→ゆうちょ銀行 記号:10030 口座番号:10458561
●その他の場合→ゆうちょ銀行　店名:〇〇八(ゼロゼロハチ)店
口座番号:1045856　※2013年10月31日(木)まで

参加する

釜石まつりで伝統神楽を体験！
10月20日(日)正午　釜石駅横のシープラザ釜石をお神輿が出発。
15時ごろ東前バス営業所にて奉納の舞。

コラム　つぎの震災に備える

「災害から学ぶ」を始めよう

RQ災害教育センター代表 広瀬敏通さんに聞く

三・一一後、被災地に多くのボランティアが向かった。しかし、自ら衣食住を確保できない者はかえって迷惑、という報道が繰り返され、そのハードルの高さに被災地行きを断念した人も多い。「RQ災害教育センター」の前身である「RQ市民災害救援センター」は、ボランティアが身体ひとつで参加できる体制を発災直後から整備。参加者の食事、長靴、ヘルメット、軍手などを事前確保し、宮城県北部に複数拠点を置いた多様な救援・復興活動を行った。

「RQの活動スタイルの特徴は、ピラミッド状の組織を排した、誰もがリーダーであるようなアメーバ状の組織作り。ボランティアスタッフは、現場で、自分自身の責任で、考え、行動することができるのです」(広瀬敏通さん)。

救援センター終了後の二〇一一年末に新たに立ち上がったのが「RQ災害教育センター」だ。同センターでは「災害教育」を「被災者、ボランティア、被災地への訪問者らが、被災地や被災者の窮状に接して繰り返し抱く共感や貢献の感情と利他の行為を、人格的成長の資源として捉え、わが国の、ヒューマンで災害に強い社会形成に不可欠な資質を獲得する現場教育を言う」と定義。災害ボランティア活動はもちろん、被災地とのさまざまな関わりこそ、人間性にあふれた災害に強い社会形成に不可欠なものと位置づけている。

「災害教育の大きなテーマは被災地でのボランティア活動が参加者にもたらす成長、教育効果です。参加当初は指示を待ってからでないと行動できなかった多くのボランティアが、数日のうちに責任を持って決断、実行ができるようになっていく。貢献の感情が人間的な成長を促していく。他のどんな座学やワークショップでも得られない教育効果の秘密を解くことが、新たな社会作りにも有益な知見をもたらしてくれるはずです」(同)。

同センターでは、「災害教育」という未知の教育分野を確立するための調査、研究に着手したばかりで、現在はRQの活動に参加したのべ四万五千人に対するアンケートなどを行っているが、今後は多様な分野の専門家、研究者を集め、災害があらわにする社会問題の解決に「災害教育」がどのような役割を果たすことができるのかを解明していきたいとしている。

(文＝加藤久人)

被災地支援の現場は、私たちが本来持っている「生き抜く力」を目覚めさせてくれると広瀬さんは語る

支援金を送る　会員になる　参加する

今後のモニターツアーやワークショップの予定、入会申し込み、活動支援金寄付は公式サイトを参照。
http://www.rq-center.jp

ひと部屋単位から施せる倒壊防止策―既存家屋も新築も

しなやか構造で阪神淡路大震災級の揺れに耐える「吸震工法 壁柱」

いつ、どの地域が巨大地震に襲われてもおかしくない、現在の日本。学校や病院などの公共施設や橋脚、高架などの社会インフラに関しては耐震補強が進んでいる中で、立ち後れているのが個人住宅の耐震補強だ。費用もさることながら、内装を剥がすなどの理由で、工事期間中一時的に住めなくなるといった事情も、人々が二の足を踏む一因となっている。

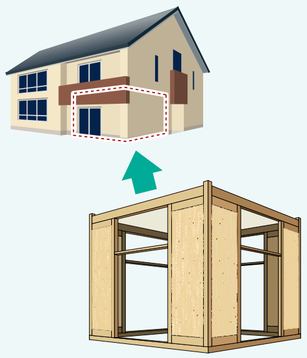
京都大学と(社)大阪府木材連合会が共同研究した「吸震工法 壁柱」(かべばしら)は、長さ約270センチ、幅9センチの角材9本を並べ、ボルトで連結したパネル状の耐震壁。部屋の四隅に合計8枚を設置することで、阪神淡路大震災を上回る規模の揺れにも耐えられるようになるという。耐震補強の多くが、ひたすら強度を増すものだったのに対し、角材どうしの間隔を少しだけ開け、揺れを吸収して建物を守るしなやか構造が特色。京都大学防災研究所での「実物大振動実験」でも、優れた性能を確認済みだ。

研究・開発に携わる同研究所の川瀬博教授は「現行の耐震基準は、いわばガチガチに硬くすることに主眼を置いているので壁材の量が増える。これに対し、『壁柱』は硬さに加えて粘り強さを追究した工法。阪神淡路大震災のような内陸地震でも倒壊しにくいという特長がある」と解説している。新築住宅にも補強材として利用できるよう日本建築総合試験所(大阪府)でさらに評価データを積み重ね、国交省に申請。2012年末には認定がおり、新築の補強にも施工可能となった。

施工は、1部屋であれば1日で済むので、住みながらの補強工事が可能なのも売り。そのため、1部屋だけのシェルター化の工事から始め、予算と相談しながら順次家全体を補強すれば、安心感もより高まる。費用は1部屋の施工で70～80万円となっている。

この「壁柱」に使われる角材は、国産杉の間伐材。杉や檜などの針葉樹をまっすぐ育てるために密植し、成長の過程で間引くのが間伐だが、製材価格の下落とともに間伐のコストがまかなえなくなり、人工林の多くは間伐がなされないまま荒れていくか、間伐が行われても山林にうち捨てられているのが現状。間伐材の有効利用のサイクルが回り始めれば、健全な山林を取り戻すことができ、山の持つ保水力向上も期待できる。

一般家屋の耐震補強と森林保全を同時に可能にする「壁柱」の普及に期待したい。



連結させた角材の摩擦力で、水平方向に揺れる力をしなやかに吸収する仕組み。横に40センチ変形しても元に戻る。ひと部屋から施工可能。

問い合わせ先：
社団法人 大阪府木材連合会
住所：大阪市西区新町 3-6-9 木材会館 5F
Tel：06-6538-7524
http://www.mokuzai.or.jp/

震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

株式会社FREEing
http://www.freeing.co.jp/

プラス株式会社ジョインテックスカンパニー
http://www.jointex.co.jp/

日能研
http://www.nichinoken.co.jp/

PDF Compressor Pro

あなたにもできる復興支援！

地域紙が消えた町で情報交流を再生

［大槌みらい新聞］
http://otsuchinews.net/
Tel: 0193-55-5908

松本さん（左）らスタッフと共に「町民レポーター」も紙面作りを担う。

『岩手東海新聞』釜石本社の被災・休刊により、自分たちの地域紙を失った岩手県大槌町。甚大な津波被害を乗り越えようと生きる町の人々には、地域情報の不足は辛い。そこで日本ジャーナリスト教育センターは、全国の記者や学生、町民の参加で『大槌みらい新聞』を昨年創刊した。毎号4頁の月刊紙は約5千部を町内に無料配布し、復興情報、未来を担う若者の姿、町民の営み等を紹介。Facebookやツイッターなどソーシャルメディアを活用した発信も日々行う。現地責任者の松本裕樹さんは元・茨城新聞記者。町に居を移し制作する。「仮設住まいも自宅暮らしも、また世代も分け隔てなく地域の情報を届けたい。だから紙版は町内全戸へ協力者と共に手渡しし、声を交わし作っています」。目標は同紙を地元の自立運営に託せる「みらい」だ。

サポーターになる

会費は月額1,000円、3,000円、5,000円の3種。新聞送付等の会員特典付きで3ヶ月ごと更新。詳細は以下URL（日本ジャーナリスト教育センター）、問い合わせは上記eメールへ。 http://goo.gl/bKIAM

文化・芸術からの町づくりを考察

［ひょっこりひょうたん塾］ http://hyotanjuku.jimdo.com/ Tel: 090-6229-4621

上記の大槌町は、人形劇『ひょっこりひょうたん島』のモデルとされる無人島・蓬莱（ほうらい）島を擁する地でもある。町の震災復興への努力は、ハードだけでなくソフト面でも求められる。そこで文化・芸術を通した新たな町づくりを、「ひょうたん島」の主人公たち同様の前向きさで探るのが同塾だ。昨年6月から、文化施設、地域ブランド等の専門家と共に考える「文化芸術まちづくりゼミ」や、芸術家と町内で野点（のだて）を行う「フィールドワーク演習」を実施。町と東京都等の共催で、ゲストも参加者も町内外双方から迎えた。元持幸子・事務局長いわく、そこには「町の主体性を大切にしつつ、まず多様な視点の獲得を」との想いがあった。今後は芽吹いた種＝発想や人材をさらに育てるべく、新たな活動を計画中。

参加する

今年度の活動内容、催しの参加者募集等は上記ウェブサイトにて近日公開予定。

DIYから生まれた、被災地の新産業

［石巻工房］ http://ishinomaki-lab.org/ Tel: 0225-25-4839

津波の被害を大きく受けた宮城県・石巻市街地を拠点に始まった、建物の復興支援。「個人で家を直すのは難しいが、棚や家具ならDIYできるのでは」被災直後に現地入りした建築家の芦沢啓治さんらはそう考え、2011年6月に石巻工房を設立。修繕依頼を受けつつ、市民自身でも修理ができるよう工作所と道具を開放した。同年の秋には、仮設住宅に必要な縁台などの家具を、デザイナーや企業と協働で制作。それをきっかけに、石巻工房では家具の制作・販売をはじめ、今では東京で展示会を行うなど、石巻の新たな産業として根付いてきている。真の復興とは地元の人が稼いでいけるようになること――そう考える彼らは、「石巻の家具」が地元で雇用を生む大きな産業となり、そして、被災地の新たな復興モデルとなるよう邁進している。

完成品の他、購入者が楽しく組立可能な品も。
写真は「ISHINOMAKI STOOL KIT」（7,050円・送料込）。

購入する

下記ネットショップから石巻工房の家具・製品が購入可能。
http://store.shopping.yahoo.co.jp/ishinomakilab/

震災復興を資金面で応援する「中間支援」

［一般財団法人 地域創造基金みやぎ］（通称「さなぶりファンド」）
http://www.sanaburifund.org/ Tel: 022-748-7283

「あづめっちゃ」は子供、若者、高齢者、外国人居住者等を対象にした5つの復興活動に寄付できる。

「地域創造基金みやぎ」は、震災復興に携わる事業者や、支援を行うNPOなどを資金面などで応援することを主な目的に設立されたコミュニティ財団。資金面でのバックアップの他に、助成金獲得のためのサポートや、企業の社会貢献活動の支援なども行っている。現在寄付を募集しているのが「あづめっちゃ」プログラム。公募で選ばれた様々な年齢層に関わる5事業の中から、応援したい事業を名指しで寄付することができる。常務理事で事務局長の鈴木祐司さんは「ただ寄付をお願いするのではなく、寄付金が生む変化を明確にアピールすることで、負担をみんなでシェアするという考え方を拡げていきたい」と意欲的。「新しいお金の流れ」の胎動に期待したい。

支援金を送る

詳細内容は上記ウェブサイト参照。「あづめっちゃ」プログラムへの寄付（5月31日まで受付）や、地域創造基金みやぎの運営支援寄付は以下URLから。
https://mp.canpan.info/sanaburifund/

購入で応援しよう！

— チャリティ通販 —

※表示価格はすべて税込です（送料別）。
※ここに掲載されている飲食品はすべて、放射性物質検査の結果が国の定める基準値以下のものです（2012年12月1日）。

サンマたっぷり、庶民の味わい復活

［がんばる女川セット］（宮城県女川町）

女川湾で水揚げされ始めたサンマのすり身や黒酢煮をはじめ、秘伝のタレで中骨までじっくり煮込み昆布巻きにした「リアスの詩」など、震災前からの特産品を盛り込んだ詰め合わせ。地元の人も太鼓判を押す庶民の味が復活した喜びと感謝の気持ちを、全国へ。

Aセット3,000円
（リアスの詩、焼きバラ海苔、銀鮭そぼろ、サンマのすり身、さんま黒酢煮の5点）

Bセット5,000円
（Aセットに塩ウニ、さば一夜干しを加えた7点）

ご注文は⇒ 女川町観光協会
Tel：0225-54-4328
http://www.onagawa.org/

選び抜いた新鮮な海の幸を当日出荷

［三陸復興おまかせ特別便］（岩手県大船渡市）

津波の被害を免れた数少ない船と震災後の新造船で少しずつ漁が再開する岩手三陸の港。漁師と市場関係者がひたむきに力を合わせ、とれたての魚介類の中から一つ一つ吟味した海の幸を保冷して当日出荷、できるだけ新鮮なままお届けします。

2〜3人前 3,000円 5人前 5,000円

ご注文は⇒ 有限会社 三陸とれたて市場
Tel：0120-369-841
http://www.sanrikutoretate.com/

読んで知る・備える —書評ほか—

被災者のホンネが詰まった防災本

［書籍：地震イツモノート——阪神・淡路大震災の被災者167人にきいたキモチの防災マニュアル］
地震イツモプロジェクト編、渥美公秀（監修）、寄藤文平（絵）
木楽舎
1,575円 お買い求めは⇒ お近くの書店で

地震発生時の恐怖や混乱から避難生活の苦痛、あきらめ、感動など被災者のホンネが親しみやすいイラストとともに語られ、災害がジブンゴトとして引き寄せられる一冊。生々しい実体験を読み進めるうちに、住まいの耐震化や日ごろから備えておくべき食、生活用品のヒントも見つかる。

震災後の地域活動に資するヒントも

［書籍：地域を変えるソフトパワー
アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験］
藤浩志＋AAFネットワーク著
青幻舎
1,890円 お買い求めは⇒ お近くの書店で

過疎、シャッター街、伝統行事の危機など、地域課題に向き合う全国のアートプロジェクトを紹介。草の根の試行錯誤は震災後の諸活動のヒントにもなる（いわき市の最新事例も登場）。これらが連携するアサヒ・アート・フェスティバルの10周年に編まれた好著。

読者プレゼント

今回ご紹介した品々から以下を読者に抽選で進呈致します。

A. がんばる女川セット（Bセット） 1名（提供：女川町観光協会）
B. 三陸復興おまかせ特別便（2〜3人前） 1名（提供：三陸とれたて市場）
C. 地震イツモノート 5名（提供：木楽舎）
D. 地域を変えるソフトパワー 3名（提供：AAFネットワーク）

以下ご記載のうえ、このページ右下に記載の編集部宛（ハガキ／Fax／eメール）にご応募ください。
①希望プレゼント（A〜Dのいずれかを記入） ②郵便番号・ご住所・お名前・電話番号・性別・年齢
③よかった記事のタイトル ④ご感想・ご意見
※2013年4月20日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。
※個人情報は当選者への発送に使用させていただく以外は、第三者への提供等一切行いません。

震災リゲインプレスとは

遠くにいてもあなた自身ができる、ちいさな震災復興支援をご紹介するフリーペーパーです。年4回発行。日本全国誰もが未知の震災に「備えて」欲しいという願いも込めた媒体です。震災支援者の活動状況をお伝えするウェブサイト「震災リゲイン」（www.shinsairegain.jp）の姉妹メディアでもあります。

編集後記

東日本大震災から2年。これは長いのか？ 短いのか？ まちの再生をゴールとするとまだ今はスタート間もない地点。気長な継続が大切。経済復興の時間としてはしびれを切らすほど長い2年。もっとダッシュをかけねば。1人でどっちもこなすのは無理だから、みんなで役割分担しよう！（高木伸哉）

発行継続のためのご寄付願い

寄付する

ひとり一人が震災に備え、復興を支え合う。そのための無料の震災専門紙である小紙をご支援下さると幸いです。ご寄付頂いた方へは毎号をお届けし（郵送先を下記編集部までご通知下さい）、差し支えなければお名前をウェブサイトでご紹介致します。

以下いずれかにご入金ください 個人：1口3,000円／年 法人・団体1口30,000円／年から。
［寄付先］ゆうちょ銀行総合口座 記号：10000 番号：82078551 名義：震災リゲイン
ジャパンネット銀行 すずめ支店 普通口座 8283215 名義：一般社団法人震災リゲイン

ご意見、情報もお待ちしています

一般社団法人 震災リゲイン 震災リゲインプレス編集部 eメール：info@shinsairegain.jp
〒106-0044 東京都港区東麻布 2-28-6 Tel：03-3584-3430 Fax：03-3560-2047

参加・協力（五十音順）：相澤久美、岩室晶子、内田伸一、宇野求、加藤久人、川嶋直、杉山昇太、関口威人、高木伸哉、中尾悠、中川哲雄、中谷正人、中野民夫、橋本裕之、長谷寛、水野哲雄、山道雄太、吉田朋史、若松海